■　ドル/円、ユーロ/ドルともに目線はやや上！？

前回更新分の本欄で指摘したとおり、ドル/円は 6 月半ばに 5/10 高値と以降の高値を結ぶレジスタンスラインを上抜け、次いで 21 日線をも上抜けた。その後、しばらくは一目均衡表の日足「雲」下限に上値を押さえられるような格好となっていがら、今週 26 日、27 日には日足「雲」下限・上限をクリアに上抜け、いまだ足下では強気の展開を続けている（下図参照）。

日々線が日足「雲」を上抜けるのと同時に日足の「遅行線」も日々線を上抜けており、チャート上の買いシグナルはますます強まる…。さらに、足下では 21 日線が上向きになってきはじめており、今後一段と上値余地を拡げる可能性があることを感じさせる。

前回、当面の上値の目安として、一つに「5/10 高値から 6/14 安値までの下げに対する 61.8%戻し＝112.25 円あたり」という水準を上げたが、すでに足下では同水準を上回る場面も見られている。次に目安となり得るのは、やはり 31 週線が位置する水準で、現在は 112.94 円に位置している。ちなみに、5/10 高値から 6/14 安値までの下げに対する 76.4%戻しは 113.06 円と計算され、やはり 113 円前後というのが当面の上値の目安の一つになりやすいと見られる。

その上方には 3/10 高値と 5/10 高値を結ぶ一つのレジスタンス（図中・紫点線）があり、その存在は一応意識しておきたい。このレジスタンスをすんなり超えてきた場合には、少し長い目で 4/17 安値と 5/10 高値、6/14 安値を元に弾き出される N 計算値＝115 円処が視野に入ってくる可能性もあるだろう。

一方、目下の市場ではユーロが急激に値を戻す様もよく目につく状況となっている。市場は ECB がいよいよ出口戦略に向けて本格的に舵を切ると見込んでいる模様だ。少し振り返ると、6 月 8 日に行われた ECB 理事会では、市場の期待が見事に裏切られることとなった。実際、その時点では少しばかり時期尚早、期待先行であったと思われる。では、6 月初旬と現在で一体何が変わったというのか。

これまで ECB が容易に出口戦略へと舵を切れなかった理由は大きく 2 つ。それは「低インフレ」と「欧州政治リスク」であった。前者の状況は依然として完全に払拭できておらず、今しばらく時間が必要であろう。後者については、6 月 11 日と 18 日に行われた仏国民議会（下院）選挙においてマクロン新大統領率いる「共和国前進」が広く強い支持を得たことで、一気に払拭されたと言っていいだろう。つまり、かつてあった「欧州各国でポピュリズム政党が躍進して EU 離脱ドミノが生じる」との懸念を彗星のごとく登場したマクロン氏が吹き飛ばしたのである。

もちろん、インフレ率の方に目を向ければ、足下のユーロ高（戻り）には少々行き過ぎなところもあるように思われる。ただ、いずれにしても相場が動意づくことは好ましいことであり、今後の行方を興味深く見定めながら、戦略的に向き合って行きたい。　（6 月 29 日　12：15）